信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	**「ドイツ環境ゼミ」:環境マインドをもったグローバル人材育成のためのドイツ視察研修プログラム**	
学部・研究科名	全学教育機構	
プログラム実施期間	2018年 2月17日～3月12日	
研修先(国・都市・施設名)	ドイツ・レーゲンスブルク、ハノーファー他都市	
参加者数 ： 8名		知の森からの支援者 ： 8名
プログラム概要	2/18:ミュンヘン市内視察～レーゲンスブルクへ移動 2/19～3/2:語学研修(Sprachschule HORIZONTE) 3/3～3/4:移動ならびに個人視察 3/5～3/7:ハノーファー市内・近郊にて団体視察 3/8～3/10:移動ならびに個人視察の後, フランクフルトで再集合 3/11～3/12:フランクフルト→羽田(解散)	

実施状況・成果

1) 語学研修(2週間の語学コース)
レーゲンスブルクにあるホリツォンテ語学学校にて2週間のスタンダード・コースに参加. 各自の語学能力に従ったクラスに分かれ, 実践的なドイツ語運用能力の向上につとめる. 期間中は、(ホームステイの手配ができなかったため)全員が学校の寮に滞在した.
空き時間や週末は, 各自のテーマに従ってレーゲンスブルク市内・近郊や他の都市に足を延ばし, 部分的には教員が引率して環境関連施設や博物館などを視察・見学した.

2) 個人研修
各自のテーマに従って出発前に(指導を受けつつ)作成した計画を修正しつつ, 各自あるいはグループでドイツ国内を回って視察を行った.

3) 団体研修(ハノーファー市内)
本学の卒業生でもありドイツ在住で主に環境をテーマとしたジャーナリストとして活動している田口理穂氏と, ライプニッツ大学ハノーファーのフランツ・レンツ教授のサポートによって, ハノーファー市内及び近郊の各所を視察した。訪問したのは、次の各所:
3/5:ハノーファー市内の文化・歴史視察, ライプニッツ大学ハノーファー訪問(レンツ教授の講義を含む), 学生や一般市民との交流会
3/6:エネルギー自給村Flecken Steyerberg訪問(村長自らのプレゼンテーションと案内)
3/7:学校生物センターとハノーファー市気候保護局の訪問(プレゼンテーションや模擬授業)

学生の声①-繊維学部　学生

「ドイツ環境ゼミ」では、言語と環境の双方について学ぶことができ、異文化を理解することの難しさと重要性にも気づくことができた。語学学校では、日本でこれまでやってきた学習法とは異なり、ドイツ語を使って会話するといったアウトプットをアクティブに行っていることがわかった。これは、英語の学習にも通ずることであり、日本に帰ってからは、学んだことをできる限り声に発することを意識するようになった。また、自分の発する言語が不自由であるとわかっていても、以前よりも抵抗なく他言語を話せるようになった。はじめてドイツへ降り立ったとき、空港のお店で水のボトル1本さえ買うことができなかった。しかし、語学学校でドイツ語を学び、現地で知り合った人たちと会話し、街で買い物をし、レストランで注文をするなど、うまく伝わらないときがあってもドイツ語を積極的に使って、3週間の滞在でドイツの文化に浸ってきた。そのおかげで、研修の最後で日本へ帰る頃には、達成感もあったが、他言語を話す力をつけてからまた別の実践の場で試していきたいという学習意欲も高まった。

学生の声②-農学部　学生

語学学校の授業はドイツ語のみで行われ、難しく感じることもあったが、リスニング力や分からない意味を推測する能力を鍛えるには最高の場であった。出発前は、自分のドイツ語に自信が無かったが、現地の生活の中で、ドイツ語を使うことが楽しいと思うようになった。個人視察では、初めて訪れた国を個人で移動し、学校などを訪れ、英語とドイツ語を駆使して現地の方にお話を伺った。事前準備と自分の足で行動することを通して、自ら決めたテーマを調べ上げるという経験は、自分を大きく成長させたように思う。「ドイツ環境ゼミ」としてドイツを訪れたからこそ出来る経験が沢山あり、新たな人脈も出来るなど、滞在中の日々はとても充実していた。大学1年という時期に、第二外国語を現地で実際に使い、「環境」に対してより広く、新しい視野を得られたことは、かけがえのない体験となった。

ハノーファー学校生物センターでの視察の様子

ハノーファー市内での視察の様子